

JEC Summer 2005

< TABLE OF CONTENTS >

■ 特集

「新しい外国語学部」へ：インタビュー	鳥尾 克二	2
	田淵 恵梨	

■ 海外研修だより

オクスフォード英語研修	伊藤 盡	6
シンガポール観光実習	岩崎 公生	8
中国深圳日本語教育実習	本田 弘之	10
シンガポール観光実習体験記	出山 未佳	12
中国深圳日本語教育実習体験記	池 孝眞	13

■ インターンシップだより

マンチェスター	竹村 樹里	14
帝国ホテル	佐藤 郁	15
JAL	室井 繭子	16

■ 学生生活だより

クラブ・サークル紹介	硬式野球部	17
	軟式野球部	18
教務委員会より	赤井 孝雄	19
学生委員会より	金田一秀穂	20
国際交流センターより	塚本 尋	21
キャリアサポートセンターより	小山 三郎	22
IT化推進委員会より	本田 弘之	23
平成 17 年度学年歴		24

■ 教員トピックス

『ヴィジュアル版ガリヴァー旅行記』	原田 範行	25
『指輪物語フロドの旅』	伊藤 盡	26
新しい児童英語教育	豊田ひろ子	27
新任教員紹介	嵐 洋子	28
	倉林 秀男	29
	玉村 禎郎	30
	古本 泰之	31

「新しい外国語学部」へ

インタビュー実施日：平成 17 年 7 月 14 日

インタビューアー： 外国語学部 4 年生 田淵 恵梨

回答者： 外国語学部長 鳥尾 克二

(今号の特集記事として、在学生の代表として学部長のゼミナールに所属する田淵恵梨さんの協力を得て、平成 18 年度から新しくスタートをする外国語学部についてのインタビューを行いました。以下、敬称略。)



田淵：「新しい外国語学部」が来年度からスタートするそうですが、どのように変わるのですか？

鳥尾：現在、大学教育は本質的な変化を社会から求められています。企業的競争原理に基づいた大学サバイバルゲームの幕は既に切って落とされています。こうした激変の時代にあって、杏林大学外国語学部は自己変革の道を歩んできましたが、その大きな1通過点として来年度の改革が位置付けられます。具体的には、今まで「外国語学科」という1学科制でしたが、来年度からは「英語学科」「東アジア言語学科」「応用コミュニケーション学科」という3学科でスタートします。

英語学科は「英語教育コース」と「英語ビジネスコミュニケーションコース」、東アジア言語学科は「日本語教育学コース」と「中国語ビジネスコミュニケーションコース」、応用コミュニケーション学科は「表現メディアコース」と「観光文化コース」という各学科2コースの編成になります。田淵さんをご存知ないかもしれませんが、外

国語学部は現在の1学科制になる以前は、英米語学科・中国語学科・日本語学科の3学科だった時代がありました。しかし、大学は社会のニーズに合わせて自己変容する必要があるのです。今回の3学科制への復帰は、現代社会が今・そして将来どのような人材を求めているかを考え抜いた回答なのです。

今回の改革では、従来的実践的な語学教育に加え、卒業後の進路を意識した「キャリア形成教育」を融合させた理想的な教育システムを実現していくことが最も重要な目標だと考えています。日本の大学、特に文系大学・学部が抱える大きな社会問題として、「ニート」「フリーター」などのことばで代表される、大学生の就業意識の希薄さがあります。そうした、問題を解決するために、新しい外国語学部での学びは、「なりたい自分をイメージする」ことから始めてもらおうと思っています。例えば、世界を股にかける企業のビジネスマンになりたいと思う人には英語学科の英語ビジネスコミュニケーションコースを、翻訳者やジャーナリストなど感性を表現する仕事に就きたい人には応用コミュニケーション学科の表現メディアコースを、国語が得意だから日本語の教師として世界の人々に日本語・日本文化の良さをわかってもらいたいと思っている人には東アジア言語学科の日本語教育学コースを、といった具合に入学時から自分の将来像を描き、学科・コースを選択して、学生1人1人が主体的に「出口の見える」教育を受けるわけです。

田淵：私は現在、先生のゼミを中心に国際観光を専攻していますので、同じ興味を持った後輩達は、新しい観光文化コースの応用コミュニケーション学科の科目をとることになるのですか？「応用」の意味合いがわかりづらいのですが。

鳥尾：「応用コミュニケーション」という名称は、多少わかりづらいかもしれませんが、しかし、こういうことです。我々は、「コミュニケーション」と聞くと、英語・日本語・中国語など言語によるコミュニケーションのみを連想しがちです。しかし、実際のコミュニケーションは、身振り手振りから始まり、笑顔などの表情、おじぎの仕方などの身体的な表現、あるいは、絵や標識・信号、あるいは最近のITコンテンツなど、言語によらない表現手段が、大きな役割を果たします。ツーリズムの世界で大切なホスピタリティ、つまり思いやりの心をもった対応もコミュニケーションの一部です。形式知に対する「暗黙知」、理性に対する「感性」が、人間の真のコミュニケーションには必要となるのです。「応用」が意味するのは、logicとしての言語に感性を加えた表現文化を研究する、あるいはその技術を積極的に身に付ける学問領域が存在してもいいのではないかと、いや、むしろ現代社会にはなくてはならないのではないかとというのが、私たち新しい外国語学部の主張なのです。今では、「経済学」は1つの学問領域として確立されていますが、学問の歴史の中では、「経済学が学になるのか？」という問題が大真面目に議論された時代もあったのです。名称というものは一人歩きする危険性がありますが、その内実をしっかりと見据え、社会に適応した名称を選ぶ必要があると思います。

田淵：新入生ではなく、在学生にとっては、今回の改革はどのようなメリットがありますか？

鳥尾：3学科制の導入と同時に、在学生の皆さんにも大幅にパワーアップした教育プログラムで学んでもらいます。基盤教育、専門教育、応用教育に大別されるプログラムを来年度から実施します。

1・2年次の基盤教育プログラムでは、「使え

る・話せる外国語」をモットーに既に本年度から実践的な英語・中国語を習得してもらうためのプログラムが始まっています。来年度からは、海外の提携大学・提携校と「英語オンライン授業」も開講します。また、学生1人1人の夢を実現するためのキャリア・デザイン科目として「キャリア指導」「ホスピタリティ実習」なども開講予定です。

3・4年次の専門教育プログラムでは、多くの科目でITを駆使した講義が展開されるでしょうし、学生自身がIT力を高めるための「表現力強化講座」も始まります。外国語学部の講義棟であるD棟・E棟は、IT化のためのインフラも現在整備・拡充されています。ゼミナールなどでは、発表などで自己表現力を高める指導がなされていますが、来年度から「パワーポイント・プレゼンテーションコンテスト」などを開催し、学生相互の競争意識を鼓舞して、社会に巣立つために必要なITを駆使した自己表現力に磨きをかけてもらいます。

応用教育プログラムでは、「学生が自分のキャリア形成のために選べる」をモットーに「海外留学」「国内語学研修」などの多彩な語学研修プログラムを用意しています。去年、田淵さんと一緒に行ったシンガポールのSHATEC (Singapore Hotel and Tourism Education Center)も本格的な研修留学先として交渉中です。また、成績優秀者には、1年留学もしくはセメスター留学の「海外留学学費免除」のインセンティブも用意しました。

「選べるインターンシップ」もさらに充実します。現在、行われているJAL、帝国ホテル、シンガポール観光実習の成果は着実に上がってきていると思います。社会に出る前に企業などの現場を「肌で実感する体験」は、学生の就業意識を高め、自分の夢・憧れを実現する契機になること間違いなしです。

先程お話したホスピタリティ、思いやりの心を行動で表現するのがボランティア活動です。来年度からは、「選べるボランティア活動」と標して、地域密着型のプログラムも斡旋します。「八王子市国際語学交流ボランティア」「八王子市国際交流推

(Faculty Development、教員の質の向上)などの取り組みはカリキュラム競争力の向上のためですね。指摘のあった、学生課・教務課・キャリアサポートセンター・食堂が提供しているのは学生サービスです。また、このJECという冊子をご父母・保証人の皆様にお送りするのも学生サービスの一環です。この杏林大学八王子キャンパスは、地理的に駅から遠いというキャンパス競争力のハンディキャップを克服するために最大限の努力をしているわけです。学生サービスでは常置委員会を中心に、専任の教員・職員一体となって様々な問題を検討し、サービスの向上に努めています。授業評価のようなアンケートという形では学生の皆さんからは評価を受けることはできませんが、何か建設的な意見などがあれば、各部署の窓口、あるいは教員に遠慮なく伝えてください。実現できるものからどんどん実現していきます。

私が思うことは、結局のところ、大学は後にも先にも教育機関ですから、最も大事なのがカリキュラム競争力ではないでしょうか？新しい外国語学部はこの点では他の大学には負けないぞという自信、そして、いつも大学・学部をあげて競争力アップに取り組まなくてはいけないという自戒の念は忘れないつもりです。

田淵：最後に、改革に伴い学部長として外国語学部の学生の皆さんに何を期待されますか？

鳥尾：今までお話してきた今回の改革のために、外国語学部の教員は、大袈裟でもなんでもなく、寝る暇を惜しんで努力しています。中には忙しさのあまり体調を崩される方もいらっしゃるほどです。でも、大丈夫です。外国語学部は学生の皆さんのためのものです。「**あなたの豊かな未来を応援する外国語学部**」です。

外国語学部が組織として成長するように、田淵さんも自分を成長させたいと思いませんか？例えば私が着ているこのジャケットをご覧ください。ジャケットの良し悪しを決めるのは、デザイン、生地、丈夫さ・風合い、縫製のよさ、時代のニーズに即しているか、着る人の感性に訴えるものがあ

るかないかなどの総合力です。人間も同じです。皆さんも社会から必要とされる、世の中の人々の感性に訴える自分へと成長させてください。私たち新しい外国語学部は応援しています。田淵さんもこの場を借りて、先輩として後輩の皆さんにメッセージを伝えてくれるとありがたいのですが。



田淵：後輩の皆さんに一言。

来年から新しい外国語学部がスタートします。履修科目も充実し、授業の仕方もだんだんIT化されることとなります。いま、社会に求められている人材（人財）は専門知識が大学においてきちり身につけ、幅広い知識を有する人です。そのためには、大学でしっかりと目標を持ち一生懸命努力し、専門知識を身に付けた人は社会に出ても強いです。

今回の改革では、それぞれの学科に明確な目標が抱えられており、また成績優秀者海外留学学費免除の特典もあるので、TRYする学生にとっても身近な目標が定まり、大学生活を送る上でも、ただ4年間で過ぎてしまうのではなく、一つずつ目標に向かいトライをし、卒業をするときには誰にも負けないような専門知識を身につけて社会に出て行ってください。そして成果を出してください!!! がんばってください!!! 今後の杏林大学を在学学生、その後続く後輩達と共に、皆で意見を出しながら魅力ある大学に学生も参加しながら変えていきましょう。

オクスフォード英語研修

外国語学部助教授 伊藤 晝

2004年8月22日から9月15日にかけて、総勢21名の学生とともに、オクスフォードに参りました。成田を日本時間の13時05分に発ち、ロンドン・ヒースロー空港に予定通り、現地時間17時過ぎに到着。けれど、パスポート・コントロールにて大いに手間取り、長時間列に並んで待たされ、学生の中には気分を悪くする者が出てしまったので、旅行会社の添乗員の計らいで、早めに別の窓口を出ることができました。それでも1時間近く待たされました。

ゲートを出ると、毎年恒例となっている感がありますが、楠家教授がお出迎え。楠家先生や語学学校 CIE のスタッフとともに乗り込んだ貸し切りバスで、空港からオクスフォードに一直線です。1時間あまりのバスの旅ですが、まだ夏時間の英国では、長い夕刻の残照が車窓から眺める田園風景を彩ってくれます。ゆるやかにうねる丘が続く英国の農地はまわりを林や森で区切っています。

すっかり暗くなってきたオクスフォードで、語学学校の一室で待っていたホストファミリーのお出迎えの方々と御対面を果たすと、緊張と長旅で疲れがピークの学生たちは、それぞれのホームステイ先にわかれていきました。



<語学学校の側を流れるオクスフォード運河>

・研修の授業

翌朝はチューターたちと御対面。杏林大学のオクスフォード語学研修の一番の特色は、チュートリアル制度を導入していることです。英国に古くからあるオクスブリッジ（オクスフォードとケンブリッジの両大学を指します）では、大学教員は基本的に少人数の学生との話し合いで学ぶ方式をとります。このような個人指導を行う教師をチューターといいます。チューターは、学生の個人個人の特質や興味に合わせた研究指導をすることになります。この指導法は、語学を集中的に学びたいときにも大いに力を発揮します。午前あるいは午後は何時間も教師と英語だけを使いながら英語を学ぶ。個人授業の教室は、時に大学の一室のこともあれば、チューターの自宅や屋外での授業もある。



<大学の一室で行うチューターとの個人レッスン>

ただし、週に二日だけはグループ・レッスンを行って、仲間たちと研鑽を積む。普段は入れないオクスフォード大学の古い学寮の一室を使って行うレッスンは、学生たちの学習意欲をいやが上にもかき立ててくれるようだ。

・楽しいアクティビティ

このように勉強三昧の日々の中で、オクスフォードの生活や英国の文化に触れてもらおうと、様々なアクティビティも用意されている。世界中にファンがいるシェイ

クスピアの生家を訪れ、中世の佇まいを残すウォリック城を探検し、オクスフォードの緩やかな川の上を、地元の大学生よろしく舟遊びをする（伝統的なオクスブリッジの遊び）。そうしているうちに、身も心も英語の文化や生活に浸っていく。集中コースとしては長い三週間以上の滞在を、杏林の学生は心ゆくまで味わっている。学生のサポートも現地スタッフとオーガナイズをする旅行会社 UTS、そして杏林大学スタッフとの細やかな連携は、既に十年以上にわたる信頼の中から生まれた希有な関係だ。



<グループ・レッスン終了時に、楠家教授と戯れる杏林学生たち(教室のあるワダム学寮の中庭へは観光客の立ち入りは許されていない)>

・涙と笑いの感謝パーティ

毎日が驚きと刺激の連続で、気が付くとあっというまに三週間は過ぎてしまう。英語研修期間も間もなく終わる頃、杏林学生には厳しい試練、いや楽しい試練が待っている。これまでお世話になったホスト・ファミリーや毎日顔を合わせたチューターを、御礼のパーティに招待するのである。もち

ろん、パーティそのものも自分たちで計画し、楽しんで貰いたいという願いを現実のものにするべく、準備に勤しみ始める。この年は、お米を買い込み、お鍋で炊いて、カレーライスや肉じゃがで、普通の日本の料理を味わって欲しいという趣向だった。学生諸君もそれぞれのグループで、英語のカルタ遊びをしたり、日本と英国の習慣の違いを英語で発表したり、お習字を実演するなど多彩な芸(?)を披露して、来場のみんなを驚かせた。最初の週には、英語ばかりの環境で自分がやっつけられるかどうか、不安のあまりに涙を見せる学生もいたが、このパーティでの堂々とした発表ぶりは、頼もしさすら感じさせた。皆が学生一人一人の成長を実感した瞬間である。



<感謝パーティでの全員笑いの写真>

オクスフォードでの最終日は修了証授与式。最後の難関とばかりに、英語での質問が学生に飛ぶが、見事！誰もが英語で答えられた。修了証授与の後にはティー・パーティが催され、学生たちは、今度は嬉しさと別れの悲しさに涙する光景が見られた。

翌日からは、ロンドンでの完全自由行動で、観光気分を個人個人に満喫した。現在日本で公開中の *We Will Rock You!* はじめ、ミュージカルで有名なロンドンだが、字幕のない英語のミュージカルを楽しむために街に消えていった学生もいた。杏林学生の逞しい将来が彼らの背中に透かして見えた気がした。

シンガポール観光実習

外国語学部教授 岩崎 公生



2001年に外国語学部として海外における初めての観光実習をシンガポールで実施して以来、昨年3回目のシンガポール観光実習を実施した。その間2003年度のみ、イラク戦争、SARS、鶏インフルエンザ、豚コレラなど不安材料が相次いだため、中止のやむなきにいたっている。この年、経済大国日本の長期低迷化のなかで小泉政権が「観光立国宣言」を行ったことにより、にわかにな国を挙げての「まちづくり」、「ひとづくり」が問われるようになった。21世紀における日本は、これまで行ってきた「モノ」の大量生産、大量販売、大量消費、大量廃棄というシステムから脱却して、無形の「こと」に時間とお金を消費する文化立国にシフトして行こうというものである。

日本社会はすでに少子高齢化が顕著であり、農山村漁村では深刻な過疎化がいつそう進んでいる。少子化が今のペースで進んでいくと、日本の人口は21世紀中に現在の1億2800万人から半減しかねない。急激な定住人口減少は、労働市場の弱体化と消費市場の弱小化を意味する。定住人口減少を防ぐためには、交流人口を増やすことのできる程度対処することができる。スペイン、イタリア、シンガポールでは観光交流という形態をとおして定住人口を上回る交流人口を外国から受け入れ、国の活性化を図ることに成功している。当学部では、「アジアの観光先進国シンガポールに学ぶ」をテーマとして、実習に参加する学生たちがシンガポールの観光事情に直接触れることで、日本のインバウンド・ツーリズム（日本への外国人旅行）の課題を探りだせる機会にしたいと考えている。

<シンガポールへのインバウンド・ツーリスト>

2003年、イラク戦争に加えてSARS騒動の煽りを受け、入国客が激減しメジャーホテルの客室稼働率は月により20%前後まで急落した。（2002年の入国客数756万人に対し、2003年は610万人に急落）

しかし、2004年にはSARS騒動も下火になり、入国客数は2002年水準にまで復帰したもようである。シンガポールの人口が約300万人、外国からの定住者を加えても400万人であることを考えると、日本への入国客数が500万人（2003年度）という数字は、日本の人口規模からしていかに少ないかということが実感できる。

<ホテル見学実習>

シンガポールには、ラッフルズのような国宝級民族ホテルのほかに、シャングリラ、フォーシーズンズ、リッツカールトン、コンラッド、ペニンシュラ、マンダリン、グランドハイアット等など世界の高級ブランドのほとんどすべてが軒を連ねている。まさに高級ホテルブランドのデパートみたいなものだ。そのような競争市場にあって、唯一日系のパンパシフィック・ホテルは、ライバルホテルが林立するマリーナ地区で存在感のあるホテルだ。

<パンパシフィック・ホテル（以降PPHと略す）>

PPHに4泊利用したこともあり、他の見学ホテルと比べ特に手間ひまをかけた館内案内を受けた。日本担当営業部長山中三緑氏による講義内容は、ホテルの現地オーナー会社（東急コーポレーションとの折半出資）とオペレーターであるPPHとの資本関係、ホテルの経営理念と営業政策などについてであった。とくに顧客満足強化運動の一方でアソシエート（社員をこう呼んでいる）満足に注力し、地域貢献にも積極的に取り組んでいる。講義を聴いた学生たちにとっては、今後就職にあたっての企業選択を考えると、企業の経営理念（ミッションとビジョン）に共感を覚えられかどうかがたいへん大事であることが理解できたはずである。

約2時間に及ぶ講義のあと、バックスペースを含

む館内見学が行われた。特に調理場や各種作業所・事務所などを実地に見て、ホテルという組織体がいかに多くのサポートワークと連携プレイによって成り立っているかということを感じた。

上記講義と見学の2日後に、PPHの社長梅原一剛氏の特別講義が約1時間同ホテルのファンクショナルルームで行われた。梅原氏は専門分野が都市計画とのことであるが、社長の立場と経験から同社のマネージメントシステムの説明をされたあと、学生たちの就業意識を高めるべく自身の長期海外生活体験に基づくアドバイスをされた。内容は専門知識・技能の習得だけでなく、雑学を学び、志を高く持ち、ヒューマンスキルを磨きなさいというものであった。

ホテル実習以外に下記の実習を実施した。

<ホテル学校 SHATEC 実習>

ホテル学校のキッチン、教室など施設見学の後、教師による講義を受けた。またホテル学校が直営するホテル SHAVILLA でフルコースのランチを取ったが、調理からサービスにいたるまですべて学生の手になるものであった。

<旅行会社実習>

JALPAK INT' L ASIA (JPI) 松井社長によるレクチャーを PPH のファンクショナルルームで受講した。レクチャーは3部構成で行われ、第1部は「旅行商品の流通経路」について、第2部は「顧客サービス (CS)」について、第3部は JALPAK INT' L の組織図についての説明がなされた。

<食文化実習：ホーカーズ・センター>

シンガポリアンの食生活は、共働き夫婦が普通であるという社会事情もあって、ほとんど毎晩外食であるといわれる。外食の場は「ホーカーズ・センター」と呼ばれるオープンエアの屋台村、もしくは屋根つきのフードコートである。それらの食事代は日本円で平均300円～500円ほどであり、またどこにでもあることから家庭で食べるより利便性に優れ、シンガポリアンの台所と呼ばれる所以である。これら市民の台所を体験するために、チャイナタウンでのフリータイムを学生たちが自由に食事する機会とした。現在のチャイナタウンは政府によって修復再生されており、リファインされた伝統的ショップ

ハウス、路上バザール、屋台村などが展開する観光スポットとなっている。

<交通輸送手段の体験実習>

豪華客船スーパースター・ヴァーゴ号に乗船して1泊2日クルーズ、シンガポール/クアラランプール間で行った。その他、航空機、チャーターバス、水上バス、地下鉄 (MRT)、モノレール、タクシーなど多様な輸送手段を利用しながら、日本と異なる交通システムを実体験した。交通インフラの面ではチャンギ国際空港の巨大かつ機能的な設備のすばらしさを学生たちは忘れることができないだろう。

<エコツーリズム体験実習：プキティマ自然公園>

シンガポール中心部から車でわずか30分の距離に、市民にとって貴重な山がある。わずか標高170メートル弱であるが、唯一トレッキングを楽しめる山だ。いまなお熱帯樹林に覆われ野生のサルが群れを成して生息している。日曜日になると、トレッキングを楽しむ市民、自然観察にきた小学生たちでにぎわっている。杏林の学生たちのほとんどは普段トレッキングと無縁であるが、プキティマ・トレッキング参加を契機に、自然保護、環境保護の重要性に関心をもってくれたら幸いである。

<ナイト・サファリ>

隣国マレーシアのジョホールバルへのルート上にナイトサファリ・パークがある。ここはコモド・ドラゴンと呼ばれる巨大トカゲ (通称人喰いドラゴン) など日本の動物園にはいない動物を見ることが出来る。動物たちは檻もフェンスもない熱帯雨林の地で、より野生生活に近い状態で放し飼いされており、大人にも子供にも感動的だ。

<ショッピング産業実習：免税店 DFS ギャラリー>

旅行者と旅行会社の双方にとって、旅行の3要素は宿泊、食事、交通であるがショッピングと遊びもまた重要な要素である。特に日本人旅行者の場合にショッピングが旅行目的のなかでしめる比重が高いと思われる。実習企業として今回もデューティフリー・ショッパーズ (DFS) を選んだ。DFS の会議室で DFS と旅行会社との取引関係の仕組みなどについてレクチャーを受けたあと、店内の観察/買い物を行った。

日本語教育実習Ⅱ 海外研修報告

外国語学部教授 本田 弘之

外国語学部の授業である「日本語教育実習Ⅱ」(海外・国内の教育機関における教育実習)の一つとして、2004年9月6日から20日まで、中国広東省深圳市の深圳職業技術学院にて、海外日本語教育実習をおこなった。学生および引率教員は、全員無事に9月20日帰国した。実習中、特に報告すべき事故などは発生しなかった。

この実習は、とくに卒業後、海外の日本語教育機関で日本語教師として就職することを希望する学生のためにおこなっている。毎年、実施されることになっているが、一昨年はSRASのため中止となったので、昨年は2年ぶりの実施であった。参加したのは、7セメスター5名・5セメスター1名の計6名である。うち1名は韓国人留学生であった。

この教育実習は、実際に日本語教師となって活躍できる人材の育成を目標にしている。したがって、事前に「日本語教授法演習」と「日本語教育実習Ⅰ(学内実習)」で好成績をおさめた学生のみに参加を認めることとしている。日本語教師養成課程では、教育実習を、将来の職業選択に直結する重要な体験であると位置づけている。すなわち、観光目的や、休暇中の遊び気分で参加することは意味がないと考えているのである。そこで、実習に参加するためには、ふだんから講義と演習に真剣に取り組み、きびしい条件をクリアしなければならない。また、参加者を厳選しなければ、実習実施校に多大な迷惑をかけるおそれがあるからである。さらに、「教育実習」の性格上、あまり多人数で実施することはむずかしく、効果もあがらないのである。

今年、実習をひきうけてくれたのは、深圳職業技術学院であった。その名のとおり職業教育を専門とする学校で、日本でいえば短大と高等高専と専修学校を総合した学校である。開学して、まだ10年という若い学校だが、発展著しい深圳市に位置することもあって、すでに学生総数1万6千人という大きな学校に成長している。実習はその学校の外国語学部アジア言語学科でおこなった。この学科は日本語と韓国語コースから構成されている。現在、深圳・広州を中心とする珠江デルタには、7000社ともいわれる日系・韓国系企業が進出しているので、卒業生の就職率がきわめて高く、それともなって学生たちの学習意欲も高い。実際に学生の日本語力は、中国の他の都市の4年制大学の学生にも劣らないと感じた。彼らは、全員が卒業時まで「日本語能力試験2級」に合格することを要求されている。

中国でもいちばん新しい都市である深圳には、中国全土から実力のある人材があつまってきている。それは、学院の教員も同様である。この学院は「大学」ではないが、中国の他の都市なら、優に大学教員がつとまるような人材を教員としてそろえている。年齢層が若く、高学歴で、留学経験がある教員が多い。この学校に教員として就職するのはかなり難しいが、そのなかに、杏林大学外国語学部・大学院国際協力研究科を卒業した羅如新先生がいる。彼女の提案により、今回の実習を行うことになったのである。実習開始後、羅先生には、指導の中心として活躍していただいた。また、羅先生の後輩ということで、徐学部長、張学科長をはじめとする諸先生が

たも、親身になって指導をしてくださった。人間関係をことのほか重要視する中国の社会では、このような杏林大学と実習校の架け橋となるキーパーソンをもつことが非常に重要である。ふつうの海外実習では、これほど親身になっての指導を受けることがあまり望めないのが、今回、実習に参加した学生はじつに幸運であった。

実習生は、一人1クラス、または二人1クラスの担当クラスをもち、そのクラスの担任教員の指導により、実習授業をおこなった。実習時間は一人3時間～5時間である。そのほかに、授業見学や他のコース（ビジネス日本語、観光日本語など）の見学、実習をおこなった。全体に密度の高い実習であったといえる。

実習中の宿泊は、キャンパス内の国際交流センター招待所である。部屋にはホテルに近い設備があり、コインランドリーもある。食事は、おもに宿舎に近い学生教職員食堂であった。毎食、食べているとやや飽きるが、中国の他の大学の学生食堂にくらべ味はかなりよい。また、この地域はSARS以来、衛生管理に気をつけており、衛生面で信頼できるのがなによりだった。夏の実習にもかかわらず、下痢や腹痛などをうったえた学生はまったくおらず、健康面でも心配することはなにもなかった。

キャンパスは、深圳市の中心部からやや離れており、移動が不便であったが、実習生の安全管理という点ではすぐれている。なお、キャンパスの周囲については治安も良好である。スーパーが学内にあるほか、学校の周囲に商店があり、生活面において不自由は感じなかった。

このようなめぐまれた環境で、実習生たちは実力を十分に発揮し、最後は職業技術学院の学生と涙で別れをつけることができた。また、職業技術学院の先生がたからも高い評価を受け、将来はここで働かないかということばをかけられた学生もいる。このようないい実習をさせていただいた深圳職業技術学院と先生がたに深く感謝したい。

また、深圳での実習後、帰路に立ち寄った香港でも、杏林大学卒業生の呂氏と三浦さん夫妻にお世話になった。彼らは、杏林大学在学中に知り合い、結婚して香港に在住している。参加学生にとっては、教育実習だけではなく、外国語学部の卒業生が世界で活躍していることを実感できたという意味でも、大きな収穫をおさめた実習だったとおもわれる。

なお、外国語学部では、本年度(2005年度)も同様に「日本語教育実習Ⅱ」を実施する。今年も昨年同様、きびしい条件をクリアした11名の学生が参加することがすでに決まっている。



<実習風景>

■海外研修だより：中国深圳日本語教育実習

シンガポールの観光実習で学んだこと

出山 未佳

昨年12月に友人と訪れてからシンガポールの魅力にとらわれてしまっていたのだが、二回目となる今回の旅は、前回とは異なった目的意識を持って充実した時間を過ごすことができるだろうと思い参加することにした。その異なった目的意識とは、前回はシンガポールとはどのような国か、またどのような観光ができるのかを観光客の視点から体験し満喫することであったが、今回はツーリズムを学ぶ学生として、この国の観光産業について外面だけではなく内面にも重点を置いて学ぼうというものであった。これは普段の旅行では経験できないことで、いい機会である。

シンガポールは島の隅々が観光として楽しめることができる、観光産業が経済基盤となり成り立っている国である。ホテルやレストラン、乗り物やレジャー施設が充実していて大変賑やかであるが、それぞれの概要を実際に体験したり見たり聞いたりして学ぶことができた。

ホテルインスペクションでは5つのホテルを訪問したが、中でも印象に残っているのは私が事前調査を行った SHANGURI - LA であった。地上の楽園と言われるに相応しい景色や空間が広がっていて見ていてだけで満足できたし、日本人のお客様が安心して泊まれるような心配りや、部屋も他のホテルにはない工夫が多々あり、お客様を惹きつける魅力が充分にあると感じた。私もいつか泊まってみたい。

Pan Pacific では、ハウスキーピングの仕組みや宴会場の裏など普段見ることのできないホテルの裏側を見ることができた。そこには表の華やかなイメージとは正反対の緊張感が漂う雰囲気があった。誕生日は休暇がとれる・歯科医院の費用を負担してくれるなどの従業員に対する保障は従業員満足となり、それが顧客満足へと繋がるという仕組みも、ホテルとしてのお客様に空間と安らぎを提供する機能を果たすために必要な要素であることがわかった。

SHATEC の見学では、現地の同世代の方々からホテル業やツーリズムについて学ぶ姿がとても刺激になった。昼食は彼らが心を込めて料理してくれたものを頂き、さらに彼らの心のこもったサービスを直接受けたのだが、体調が悪かった私の為に料理を一部変えて提供していただいたのにとても感動した。ここは他の立派なレストランと何一つ変わらない完成されたすばらしさがあった。

DFS GALLERIA では、コンセプトやビジネス戦略、今後の目標などをプレゼンテーションしてくださり、ただお買い物をして終わるのでなく、そこにいる間にも、「見る」「食べる」「遊ぶ」「買う」といった観光の総合的な要素を取り入れた一つの観光地であるということを教えられた。

今回の実習の中で最も印象に残っていることは、現地に住む方の家庭訪問ができたことだった。これはなかなか出来ることではないし、観光とは関係ないが、この国の生活や文化を直接感じる事が出来る大変いい経験であった。訪問先のスーロンさん宅では家族のこと子供の教育のこと仕事のことなど家庭訪問でなければ聞けないようなことをわかりやすく丁寧に話してくれ、さらには私達のために丹精込めて手料理を作ってくれた。この国の人は観光もすばらしいけれど人も優しく親切で明るいという良いイメージを得られたことがとても嬉しかった。

実習中は一日添乗員補佐をやらせていただいた。その経験を通して、添乗員の仕事をするとするのは常に時間の管理や参加者の安全を頭に入れながら行動しなければならず、緊張感を持って仕事をすると大変さがあることを知った。

鳥尾先生は実習前から時空価値について何度もおっしゃられていたが、最初は時空価値なんて気にせずにご経過していた。けれど、3日目の朝に何気なく部屋の窓から見える壮大な景色を見たとき、そのすばらしさに心を打たれ、それだけで充分にいい時間を過ごせたような気がした。何気ないこの瞬間こそ旅の醍醐味なのであろうと、鳥尾先生がおっしゃられていたことを初めて理解できた。

シンガポールは領土が狭いため、簡単に島内を行き来できる。また多くの人種がうまく共存している。移動の時間を取らずに島全体を観光することができ、様々な文化や言葉や生活に出会うことができるのはこの国のすばらしいところであろう。これらのことを活かすことで観光立国として成功を収め、さらにホテル業やツーリズムの発展にもつながり現在に至ったのではないだろうか。今回この実習に参加して観光を発展させるためには、観光資源となるものを作っていくことも大切だが、その国そのものを観光要素として活かしていくことのほうが観光客に受け入れられ、成功に繋がるのではないかと思った。私は日本のインバウンド・ツーリズムについて学んでいるのだが、今回のこの経験をきっかけにさらに日本の観光産業の発展に力強く貢献していきたいと思った。

今回お世話になった岩崎先生、鳥尾先生、稲垣先生、京王観光の在津さんには心から感謝します。

「人との出会い」

池 孝眞

「バスでは荷物に気をつけて、夜は一人で外出しないで」

中国に詳しい本田先生の不安なことばである。

本田先生の日本語教育実習Ⅰの授業を受けていて、中国での日本語教育のプログラムがあると知り、実際に教えられたらいいなあと思い、参加することになった。

韓国人が中国に行って、日本語を教えるなんて！…先生の不安な言葉より、私は中国学生たちにどう受け入れるかのほうが不安だった。

香港からたった一本、地図上の線を越えるだけなのに、深圳に入るとたちまち、香港とはガラリと空気が変わるのを感じた。

迎えに来てくれた、深圳職業学院の先生たちと挨拶をした後、ある先生が「韓国人学生がいると聞いたんですけど、どの人ですか？」と質問してきた。

私はあまりにも不安な気持ちがいっぱいだったので、「はい～」と元気ない声で返事をしてしまった。不安な表情を見せたかもしれない。

でも中国人の先生はそんな私の不安な気持ちを悟ってか、笑顔でいろいろな話をしてくれた。学校に向かうバスの中で、視線を上に向けると近代的な高層ビルが林立する大都会が私の目に入った。とにかくでっかい～！

深圳職業学院は思った以上に大きいし、池もあるし、自然に恵まれた環境であった。学校内に音楽も流されて活発なキャンパスでの大学生活を送っている学生たちと出会った。

初めての授業では、あまりにも緊張しすぎて準備していた挨拶もうまく話せなかった。でも私たちは同じ日本語学習者であり、日本人には分からない日本語の難しさを知っているので、その事を生徒たちにアピールした。

私は、友人と二人で同じクラスを教えることになった。彼女とは授業に対する意見の食い違いで、衝突することもたびたびあったが、実際の授業では息がぴったりで、アドリブも効いて、学生たちと楽しい授業を持つことができた。この実習のおかげで、彼女ともより深い付き合いができるようになって嬉しかった。

私の夢は日本語教師になることだ。

最初のうちは緊張のせいか、発言が少なかった学生たちも時間が立つにつれ、笑顔がこぼれるようになり、返事も大きい声でしてくれるようになった。

このように実際に学生たちと向き合っ、日本語を教えて行くうちに、より深く日本語教師になりたいと思った。

一時間半の授業はとても楽しかったので、時間が短く感じられるようになっていった。そして、二週間の実習はあっという間にすぎた。

私はこの実習を通じて、たった二週間だったけど、学生たちが着実に成長していく姿を見て、言葉には表現できないやりがいを感じた。

ある学生からの言葉が今も思い出す。

「先生の授業はイキイキです。」

この言葉を忘れないで、この言葉を胸において夢が現実にするように頑張って行きたい。

(池 孝眞さんは、今年の3月、杏林大学を卒業しました。希望がかなって、4月から韓国・ソウルの日本語学校で日本語教師として勤務しています。)

My Stay in England

(マンチェスター研修修了に際して)

Juri Takemura (竹村樹里)

at Manchester

Three-month stay in England was a very good and exciting experience for me. English life was sometimes very confusing but I could enjoy it very much. Actually, it is very sad for me to leave England; I wish I could stay here much longer.

Now people in this country adopt the summer time system. As the sunset is about 9:30 pm and the sunrise is about 5:00 am, people put the clock forward one hour in summer and one hour back at the end of summer. I am enjoying the remains of the day after supper with my friends of the university, talking about daily occurrences in some parks or in pubs.

One of the memorable things for me is that English people like gardening very much. In England there are many nature



< 研修先のマンチェスター大学 >



< トルコ人の友人と杏林の面々：著者は左端 >

reserves and National Parks. England is very green and beautiful. Even in London, I saw some squirrels in such parks as Hyde Park and St. James Park. I could not believe that at first; I have never seen squirrels in a city park in Japan. In England, you can also see many rabbits. Sometimes a fox appeared in the park near my house at Manchester. I am never to forget such a beautiful scene in England.

As for learning English, I still feel some difficulties in expressing what I want to say. In Japan, I can delete the subject of a sentence and still make myself understood. For example, where English speakers would say “I am hungry,” Japanese speakers would just say “Hungry!” But I am convinced that through this stay in Manchester, my English proficiency has surely developed. I can realize the importance of communication and can make my view wider through communication. I would like to say my cordial thanks to people of Manchester and I strongly wish to come here again in future.

帝国ホテル研修を通して

佐藤 郁

3年の夏、私はある挑戦をしました。それはインターンシップ。ホスピタリティを学びたい、就業意識を高めたい、そんなごくありふれた考えから始まった企業研修でした。今考えてみると、研修先の帝国ホテルに関して、あらかじめ講義などでも勉強はしていたけれど、実際の現場を体験できたことは何よりの勉強になったと感じています。

私はこの研修を通して、ある大事なことに気づきました。それは、「人と人とのつながり」の大切さ、重要性。この事はホテルだけでなく社会すべてにおいても言えることだと思います。ホテルを見学したり、実際に働く方達から話を聞いたりしていても必ず結びつく事でした。帝国ホテルでは人と人が表裏一体となって働き、一人一人が「人」を大切に、仲間を大切に、お互いが助け合い、その事がサービスを受けるお客さまにも伝わっているようでした。また、皆が高い意識を持っていることを体で感じました。

帝国ホテルでは「温故知新」という言葉に、触れました。それは、古きを尊び新しきを知るということ。研修前の私は、就職活動に当たり、何故その企業の歴史や概念を知っておかなければならないのか、ということに疑問を抱いていました。しかしこの研修で色々な方のお話を聞き、感じたことがありました。それは社員の一人一人が帝国ホテルの概念や考え方をちゃんと理解し、またその人たち自身も同じ考えをもち働いているということ。会社の歴史を知るということは、その会社を知るだけではない。その歴史を知ることでそこにある理念や概念を見つめることができるんだ、ということも分かりました。そして、自分と同じ考えをもっている会社を見つけることがとても大切なことで、だからこそ私達は会社の歴史や概念をしっかり把握すべきなのだという事に気づくことができました。

将来というものは、いつどんなきっかけで開け

るかわからないということも感じました。ちょっとしたお小遣い稼ぎにやっていたことが自分の本職になった、という社員の方からのお話や、ある宿泊施設に出会いそこに泊まった時からという岩崎先生のお話などからもそのように思います。私達は今、その気になれば色んな機会に出会う恵まれた環境にいると思います。それは、趣味であったり学校であったり、アルバイトなどもそうかもしれない。興味と勇気を持ってトライしてみることは、自分に色んな付加価値や栄養を与えてくれるものだと思います。「気づき」とは、視野が広くなければできません。色んな角度から物事を見られるようになりたいと思いました。帝国ホテルの理念にもあった「挑戦」という言葉。私はこの先もずっと、それを大事に心に持ち続けたいと思いました。

また、この研修では2時間近くかけての朝の通勤ラッシュも印象深く残りました。思いのほか体力を要するもので貧血がおきてしまったこともあり、責任をもって行動することの大切さを味わいました。働くとは社会に出ることであり、私達は自立するために社会に出るのだと考えます。研修から、誇りと自信をもって働くことの大切さを知りました。

現在、私は就職活動中ですが日々、様々な事を思います。どんな形であっても自分の納得できるカタチになるよう努めていきたいです。その事を、この帝国ホテル研修で気づくことが出来ました。そして、自分にとって本当に大事なものは何かを少しずつでもいいから見極めていきたい。それは社会に出て働くからこそ見えてくるものではないかと思っています。全てをうまく伝えきることはできませんが、めったにないこのような機会に参加できたことをとても嬉しく思います。同時に、岩崎先生を始め、帝国ホテルの方々にとっても感謝しています。私は忘れません、人間だけが出来る「挨拶・笑顔・感謝」の気持ちを。

JAL インターンシップ

室井 繭子

私は昨年の夏、JALグループのJALスカイ東京という企業で、一ヶ月間のインターンシップ研修に参加させて頂きました。私は高校時代からずっと航空業界に関心があり、今までそれを目標に努力を続けてきました。そんな中、学生ながらにして社会を体験出来る、まして憧れの業界を体験出来るインターンシップという又とない機会に恵まれた事を大変嬉しく思っています。

研修内容は羽田空港でグラウンドスタッフとして働く事でした。制服を着る重みを感じながら、主に出発口に立ち、お客様に乗り遅れない様、飛行機を定時に飛ばせる様、お客様をご案内したり、お体の不自由なお客様や、お子様一人旅をご利用されている方のお世話をさせて頂いたりしました。夏休みという事もあり、研修中は超繁忙期と呼ばれる時期に当たり、本当に多くのお客様と接しました。年齢層も幅広く、様々な価値観を持っているお客様と接する中で接客業の魅力や難しさを学びました。“自分がしてもらって嬉しい事”が必ずしも通用するわけではなく、お客様が望んでいる事を察知し、全ての方に満足して頂けるサービスを提供するのは至難の業でした。しかし、だからこそお客様の笑顔や「ありがとう」の一言に重みを感じずにはいられませんでした。

この研修を振り返り、この一ヶ月がどれだけ私にとって意味のある時間であったかを今でも噛み締めています。社会人になる前に実際に業界を体験出来た事、サービス業の根源を学べた事、自分に足りない事が分かり今後すべき事が見えた事、そして同じ目標を持つかけがえのない仲間に出会えた事。こんなに多くの事を一度に吸収出来る機会を与えて下さった皆様に深く感謝をしています。



< インターンシップの仲間たちと (著者は後列左端) >



< JAL 航空機コックピットにて (著者は中央) >

硬式野球部

主務 加藤真人

私たち、硬式野球部は東京新大学野球連盟に加盟しており、学業とスポーツの両立をモットーに日々、練習に励んでおります。部員もマネージャーを含めて80人を越す大所帯となり、お互い切磋琢磨し、個人の能力を向上させるとともに、チームのレベルアップも図っています。

2月には強化練習をはじめ、7泊の合宿を行い、3月のオープン戦、そして4月から開幕する春季リーグ戦に向け、体力・技術・精神面の向上を図ると同時にチームワークを大切に、練習に励みました。

しかし、今年の春季リーグ戦では、上位校と接戦するも4位という成績であと一步、Aクラスには届きませんでした。

また、8月には強化練習と9月から始まる秋季リーグ戦に向けてのオープン戦も組まれており、実戦的な練習を中心に行い、リーグ戦での上位進出、また優勝を目指して、頑張っています。

学校関係者・OB会・ご父兄の皆様には多々、ご迷惑をおかけしておりますが、今後も、応援のほどよろしくお願いいたします。



軟式野球部

私たち、軟式野球部は現在、部員 26 名で週 3 回練習を行っています。年間 2 度のリーグ戦に参加し、年に 1 度の夏の合宿に行っています。そして私たちは先日、東関東大学軟式野球連盟のリーグ戦において優勝を飾り、杏林大学として初の全国大会出場を決めました。週 3 回と限られた時間の中で楽しく、真剣に野球に打ち込んでいます。また、練習試合も精力的に行い、練習後、試合後のミーティングを大切にしてきました。さらに部員同士とても仲が良く、キャラも豊富で最高のチームだと感じています。

全国大会は私達の最大の目標でした。しかし全国大会出場に満足することなく、全国制覇を目標に掲げてさらに努力していきます。

「野球が好きでたまらんとです。」



教務委員会より

外国語学部教務委員長 赤井 孝雄

この冊子がお手元に届くころ、学生諸君は春学期末試験も終了し、夏期休暇に入ったところだと思えます。特に、この4月に入学した諸君にとっては、初めての大学生活の数ヶ月、その緊張から開放され、ほっと一息ついているのではないのでしょうか。

さて、この冊子で特集されている通り、外国語学部では、来年度入学者より、現在の「外国語学科」の教育内容を整理・再編成し、三学科制（「英語学科」「東アジア言語学科」「応用コミュニケーション学科」）を導入予定です。さらにそれぞれの学科にコースを二つ設けます。具体的には、英語学科には、英語教諭・児童英語教師などを目指す「英語教育コース」と、英語をビジネスの世界で活かすことのできる人材を養成する「英語ビジネスコミュニケーションコース」、東アジア言語学科には、日本語教師養成を目指す「日本語教育学コース」と、中国語をビジネスの世界で活かすことのできる人材を養成する「中国語ビジネスコミュニケーションコース」、応用コミュニケーション学科には、感性のコミュニケーションを通して、自身の感性を国際社会で表現することのできる人材を養成する「表現メディアコース」と、ホスピタリティコミュニケーション（もてなしのこころ）を通じて、ツーリズム（観光文化）で世界の人々をつなぐことのできる人材を養成する「観光文化コース」を設ける予定です。

ただ、この新しい三学科制は、現在の外国語学科の授業内容（専門科目 A から E 群）を三学科・6 コースの名のもとに整理・再編成したもので、現在のものと大きく異なるものではなく、また現在在籍している学生諸君は現行の外国語学科のもとでの授業を卒業まで継続してゆくことになります。在学生諸君に混乱や変更を求めるものではありませんので、ご父母・保証人の皆様にはご安心ください。

また今回の学部改組を期に、IT 環境の整備・IT 教育の充実、インターンシップ（企業などでの現場研修）やボランティア活動、海外研修や留学制度などもさらに充実させる予定です。こちらは現在在学中の学生諸君にも利用してもらえるものです。積極的に参加することで、自身の夢の実現につなげてもらいたいと思います。

学生諸君の夢の実現のために、教務委員会に所属する教員や教務課の職員は、主に学業の面からサポートしています。教育的配慮から、時には厳しく対応することもあります。だからといって敬遠するのではなく、むしろうまく利用して、学業に支障をきたすことのないようにしてもらいたいと思っています。

最後に、学年ごとの注意点を記しておきます。

- 1年 大学生活に慣れること、そして特に、専門外国語の習得に集中してほしいと考えます。
- 2年 専門教育が始まるのと同時に、専門外国語以外の外国語、いわゆる第二外国語の学習がスタートします。また、秋には三年から始まるゼミナールのための入ゼミナール試験も控えています。さらに、三年に進級するには、62 単位を取得する必要があります。
- 3年 ゼミナールでの少人数専門教育が始まるのと同時に、就職などの卒業後にむけた準備を始める必要があります。
- 4年 就職活動や教育実習などで忙しい学生生活となりますが、卒業に必要な 124 単位を取得できるように履修計画を立てることが必要です。

学生部長の記

金田一秀穂

外国語学部の学生部長になってから 1 年経ちました。この間、予想通り、いろいろなことが起こり、いろいろと珍しい経験もさせていただきました。

八王子の山の上にも、世界の動きと無縁でいられないということを実感させられたのは、昨年暮れに起きたマレー沖津波でした。外国語学部にはスリランカ出身の学生が一人在籍していますが、彼の家族もこの津波に襲われました。彼の妹、婚約者、そして親戚 30 人余がこの津波によって命を奪われ、実家も流失してしまいました。大変傷ましいことです。

すぐに連絡を取ったところ、彼は杏林大学で学んだことを祖国の復興に役立てたい、そのために勉学を続けたいという意思を持っていることがわかり、私たちもその夢をかなえるお手伝いが出来るよう、できるだけことはしようと考えました。特別に学費免除の手続きを取り、また、教職員有志による募金活動も開始しました。あらゆる奨学金制度も適用にされないか探しました。ゼミの学生からも募金活動が始まりました。しかし、これからの学費は、到底はらえるものではありませんでした。

そんなとき、父母会である杏会にお願いしてみようということになりました。そして会長はじめ会員の皆さまには、こころよく全額の学費を払うことを了承していただきました。

一時帰国していたスリランカ人学生は、今またしっかりと勉強を始めようとしています。悲惨な写真を見せてくれ、その悲しみを語ってくれました。しかし、これからの希望にも燃えています。そういう姿を見られるのは、教師としてこの上ない幸せです。

彼の心が癒されることは難しいですが、杏会のお力を改めて感じるとともに、感謝いたします。

キャンパス内で国際交流

国際交流センター長 塚本 尋

国際交流センターは、学際的かつ国際的な総合大学としての杏林大学の特色を活かして、海外の大学や学術研究機関との学術・文化及び人的交流を実施し、人材の育成に貢献するという任務もっています。国外の諸大学との交流事務や、留学生にかかわる日常の諸事務だけでなく、キャンパス内での交流活動が活発に展開できるように積極的にとりくんでいます。

杏林大学には現在 553 人も留学生が学んでいます。在校生の 1 割強になります。外国語学部には 274 名で、中国、韓国、台湾、マレーシア、ロシア、イギリス、モンゴル、スリランカ、カナダなどからの留学生たちが日本人学生と机を並べて学んでいます。

(ちなみに、総合政策学部には 110 名、医学部には 1 名、大学院には 101 名、別科日本語研修課程には 42 名、さらに協定校からの交換留学生が 25 名、在籍しています。)

留学生たちは日本人の友達をほしがっていますし、日本人の学生たちも心の中では留学生との交流を願っています。それなのになかなか第一歩が踏み出せずにいる学生諸君が少なからずいます。残念なことです。きっかけさえあれば多彩な活動ができるはずだからです。

そこで国際交流センターは多くの先生方の協力を得ながら、八王子キャンパスでの国際交流の輪をひろげようと、交流会を主催したり、学生サークルの活動を促したり、クラスぐるみの交歓会などを企画しています。

外国語学部の学生たちは、キャンパス内でさまざまな国からの留学生との触れ合いを通じて、世界への目を大いに開くことができるはずで、「友達を作ろう」を合言葉に、杏林大学の環境を生かして、異なる価値観との出会いや表現様式の多様性を実感するなど、かけがえのない体験を積んでほしいと願っています。海外協定校などへ留学したり、海外研

修にでかけていくことも大事ですが、身近にいる留学生と、もともっと議論をし、意見をぶつけあって、切磋琢磨してほしいと願っています。



<留学生を励ます会：学生サークルによるゲーム>



<日本人・韓国人・中国人の仲良し5人組>



<スリランカ人・日本人・イラン人>

フリーターやらニートやら

外国語学部就職委員長 小山三郎

最近、この外来語らしき言葉に悩まされ続けています。学生諸君の将来の方向付けをすること。このことが四年間の学部の使命であり、このことで学部の質が問われる時代であることは確かです。とは言いつつも、いつの間にか卒業時に就職しないでふらふらすることを選択する学生が出現し、増加しています。そのため、まずフリーター、ニートを出さない教育と指導が求められるようになりました。

以下、外国語学部の進路指導の取り組みについてお話します。

①学部の講座として、「現代日本社会特論」を三年次必修で設けています。企業研修でご活躍の講師、企業の人事担当者等々、さまざまに外来講師をお招きし、学生諸君に自分の将来像を考えさせています。また日経新聞の読み方、就職対策試験を実施しています。今後、より早い段階で同様の趣旨の講座を設定する予定です。

②キャリアサポートセンターのスタッフが各ゼミの時間をお借りし、学生諸君と話し合う時間を設けました。効果はすぐにあらわれました。学生諸君がキャリアサポートの窓口に来るようになりました。こうして学生諸君との接点が生まれています。センタースタッフの大きな喜びになりました。

③各ゼミ担当教員に定期的に学生の活動状況を報告していただいております。このことで、学生諸君の動向が把握できるようになりました。

つぎにキャリアサポートセンターの取り組みをお話します。

①新しい企画として、「ランチタイム職業研究」を実施します。昼休みに教室、学生ホール



<就職合宿での企業採用担当者による模擬面接>

にコーナーを設け、定期的に学生諸君のなかにスタッフが入っていこうとする試みです。全学年を対象とします。各月によってさまざまな業界から人事担当者をお招きし、学生諸君の質問に答えていただきます。

②インターンシップを積極的に導入します。夏休み等の休みを利用し、職業体験を積極的に支援します。これまで卒業生を積極的に採用してくださっている企業の協力をいただくことで学生諸君に働くこと、職業業種の選択を考えさせる機会にしております。

③今年度も12月に就職合宿を実施します。一泊二日のこの講座は、人事担当者と実際に面接をおこない、さまざまな角度からの助言をいただける機会になります。この合宿を効果あるものとするために、8月に就職活動ミニ講座、9月合宿準備講座を開設し、履歴書の書き方、自己分析、各種面接実務指導をおこないます。

④学生支援ソフトの導入をおこなっています。Web模擬就職試験対策システムを導入し、一般常識、ビジネスマナー、適性検査、等々をおこなえます。

以上、学部、キャリアサポートセンターの学生諸君への就職支援の概略をお話しました。学生諸君の主体性とわたしたち教職員の取り組み、そしてご家庭からのご支援が一体となって成果がでるものと考えております。皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

外国語学部 IT 化推進プロジェクト

外国語学部 IT 化推進委員会

教育現場における IT 化は、時代の大きな流れである。杏林大学および外国語学部は、かなり早い時期から、コンピュータ・リテラシー教育に取り組み、情報処理の授業を必修としたり、また、学生が自由につかえるパソコン教室を設置したりしてきた。しかし、近年、中学・高校教育に「情報科」が開設され、単純なコンピュータ・リテラシー教育は、大学入学以前におこなわれる教育となりつつある。したがって、大学教育における情報関連科目は、すべてにわたって見直しが要求されている。

その一方、外国語学部において、授業の IT 化への取り組みはきわめておこなわれているといわざるをえない。最新の調査でも、外国語学部において何らかの IT 機器を使用している授業は約 30% しかなく、多くの授業が「黒板とチョーク」という昔ながらの方法でおこなわれているのである。

このような現状をとりもどし、学校運営システムと授業の双方で IT 化を進めるために、八王子三学部と事務にて IT 化推進委員会が設置されることとなった。そして、その一環として、外国語学部にも、授業の IT 化を推進するプロジェクト・チームが結成されることとなった。

外国語学部 IT 化推進委員会は、この 3 年以内に、すべての授業を全面的に IT 化することを大目標として、活動を開始した。

現在までに決定された IT 化推進の計画は右に掲げるとおりである。

■ 2005 年度（ハード環境の整備計画）

D・E 棟全教室に PC・視聴覚機器を設置
PC 60 台、プロジェクタ、視聴覚機器整備

2006 年度中に、D・E 棟全館に無線 LAN 環境を構築

■ 2005 年度上半期（授業 IT 化の推進）

授業の録画・インターネット配信・ホームページ作成

教員向け IT 講習会を実施

■ 2005 年度下半期（授業 IT 化の推進）

教員・ゼミ単位での IT 講習会実施、継続

授業でのパワーポイント、視聴覚機器使用達成率目標 60 パーセント

学生の情報収集、発信能力を養成

ゼミ単位のホームページ作成を通して情報発信

■ 2006 年度

海外の教育機関とのオンライン授業

オックスフォード（交渉中）、

シンガポール（検討中）

新カリキュラムに基づく IT 教育の実践

メディアイングリッシュなどの新規開講科目に対応

パワーポイントを使用した授業を完全実施

達成率目標 100 パーセント

すべての学生が IT 機器を使用したプレゼンテーション(英語・中国語を使用)に精通する

平成 17 年度学年歴

春学期	
平成 17 年 4/ 3(日)	4 月入学式 (三鷹キャンパス)
4/ 4(月)～ 4/ 8(金)	オリエンテーション、健康診断
4/11(月)	授業開始日
4/18(月)	履修登録 (1・2・7・8 セメスター生)
4/19(火)	履修登録 (3・4・5・6 セメスター生)
4/30(土)～ 5/ 2(月)	ゴールデンウィーク 臨時休暇
7/ 9(土)	授業最終日
7/11(月)～ 7/13(水)	補講期間
7/14(木)～ 7/30(水)	定期試験期間
8/ 1(月)～ 9/29(水)	夏季休暇
8/25(木)～ 8/31(水)	追・再試験期間
9/22(木)	9 月卒業式 (三鷹キャンパス)
9/30(金)	秋学期オリエンテーション (在学生)
秋学期	
10/ 1(土)	10 月入学式 (八王子キャンパス) オリエンテーション (新入生)
10/ 3(月)	授業開始日
10/11(火)	履修登録 (1・2・7・8 セメスター生)
10/12(水)	履修登録 (3・4・5・6 セメスター生)
10/29(土)～ 10/30(日)	杏園祭 杏園祭前後日休講 (10 月 28 日・31 日)
11/11(金)	創立記念日
12/26(月)	年内授業最終日
平成 18 年 1/ 6(金)	授業再開日
1/11(水)	授業最終日
1/12(木)～ 1/14(土)	補講期間
1/16(月)～ 1/31(火)	定期試験期間
2/20(月)～ 2/24(金)	追・再試験期間
3/18(土)	3 月卒業式 (八王子キャンパス)

『ヴィジュアル版ガリヴァー旅行記』

(岩波書店、2004年11月刊、143pp)

—ある翻訳者の告白—

外国語学部教授 原田範行

悪夢のような嵐にあつて船が難破、必死に泳いでたどりついた島は、小人の国リリパット。主人公ガリヴァーの冒険は、まちがいなく読んでおもしろい。小人の国から巨人の国、空飛ぶ島ラピュータ、そして馬が人間ヤフーと暮らすフウイヌム。途中、宮廷どうまくいかなくなることもあれば滅入ることもある。日本(ジャパン)にも立ち寄るガリヴァーに、海外にはじめて出かけた時の私たちの姿を重ねてみるのもよいだろう。もう一つ、この旅行記の面白さは、不思議な国で暮らすガリヴァーを通じて、逆に私たちの世界の不思議さが見えてくるということだ。法律なんて、どうしてあるのだろうか？人間はなぜウソをつくのか？そんなことを考えたら、この旅行記を読むのが一番。ひょっとすると私たちが住むこの世界こそ、夢のように感じられてくるかも知れない。

と、内容梗概を記して、ちょっと一息。言うまでもなくこの作品は、イギリスの作家ジョナサン・スウィフトによる世界的名作で、1726年に出版されて以来、イギリスはもとより各国語に翻訳され親しまれてきました。今回私が翻訳したのは、小学校高学年から大人までの読者を念頭に置いた、多少の書き換えを含む抄録版。それゆえ厳密に原作をたどる必要がないから翻訳も楽かと思いきや、実はそうでもありませんでした。そもそも、小学校高学年から成人読者まで親しめる日本語とはどんな文章か？正直なところ、私は編集者から相談を受けたとき、おおいに困惑しました。自分の著書なら、いかようにも文章を作れる。だが、相手は名作中の名作。ぞんざいな仕事をすれば、たいへんなことになる。しかも作品に込められた毒舌といったら、嫌悪を感じる読者さえいるに違いない—なにしろガリヴァーは、馬の国フウイヌム



に理想を見出して人間社会を否定し、フウイヌムを追放されると絶海の孤島で一人暮らしを決意するに至るのですから。幸か不幸か、ガリヴァーは「親切な」ポルトガル人船長に「救われ」、無理やりイギリスに帰国させられるのですが、「どうか傲慢な人間ヤフーが現れないことを願う」と締めくくられたこの作品の結末は、人間社会への呪詛に満ちていて、とてつもなく暗いのです。

結局私は、こうした憂慮に答えられぬまま、拙訳を上梓しました。現代イギリスの鬼才クリス・リデルの挿絵にも助けられ、幸い好評のようです。そのみならず、児童福祉文化賞推薦作品になって、厚生労働大臣表彰も受けました。名作はさまざまな読まれ方をする—小人の国、巨人の国に豊かな想像力を働かせてくれる小学生もいれば、それを人間の常識に対する厳しい挑戦と解する成人読者もおられることでしょう。私は外国語学部のある同僚からいただいたメッセージが忘れられません。「いい仕事だと思うけど、僕はつらくて読み続けられなかった」—そう、そういう作品をそう翻訳できたことを知らされて、ささやかな満足を感じたのです。

翻訳に興味を持つ学生は少なくありません。しかし翻訳という仕事は、一般に言われるほど、派手でも脚光を浴びるものでもありません。私はせめて、このささやかな満足だけでも学生諸君に伝え、言語芸術の面白さと恐ろしさを紹介できればと思っています。

『指輪物語 フロドの旅』

外国語学部助教授 伊藤 晝

映画『ロード・オブ・ザ・リング』が日本で公開されたのは、既に今から三年以上前になる。さらにそれより遡ること十年前に、私はアイスランドからの留学から帰国の途上で、英国に立ち寄った。時はちょうど、原作者J・R・R・トールキンの生誕100年記念に沸き返っているオクスフォードであった。街の一軒の大きな書店(今はなくなってしまったが)で見つけた地図帳は、トールキンの著作『指輪物語』(原題 *The Lord of the Rings*) の物語に合わせた地図帳だった。見開きの左側には地図を書いたバーバラ・ストレイチーの詳しい解説が載っている。

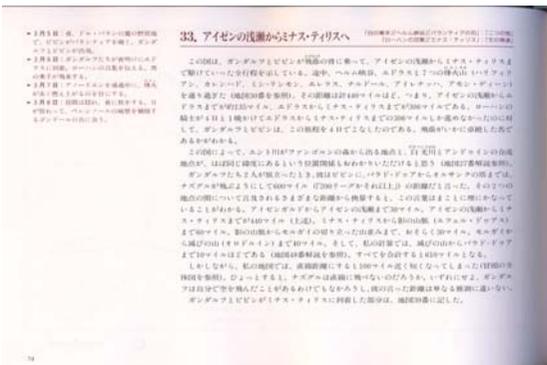
英国ばかりでなく、世界中のファンタジー文学に影響を与えた『指輪物語』は、一度でも読んだことのある方なら御存知の通り、読者の想像力を大いに掻き立てる物語である。実は、生誕100年記念として、挿し絵画家アラン・リーによる挿し絵が付けられるまで、世界中でただ日本語訳だけが西洋画家寺島龍一画伯の絵が挿入されることが許されていたが、それ以外には作者トールキンが描いたシンボリックな表紙絵と巻末に付けた地図だけが、私たちの想像力のよりどころとなるものだった。そして、読者となった人ならば、誰もがわずかばかりの地図を頼りに、なんとか

物語の中で旅をする登場人物たちの現在位置を把握したいと願ったはずなのだ。そして、もっと詳しい地図があれば、と望んだことであろう。バーバラ・ストレイチーのこの地図は、『指輪物語』の主人公フロド・バギンズと彼の友人たちが、物語の進行とともにどのような道を辿って、広大な「中つ国」なる大陸を移動したかを克明に復元してくれている。これは一度読んだ人ならば、誰もが欲しがるといえる地図である。

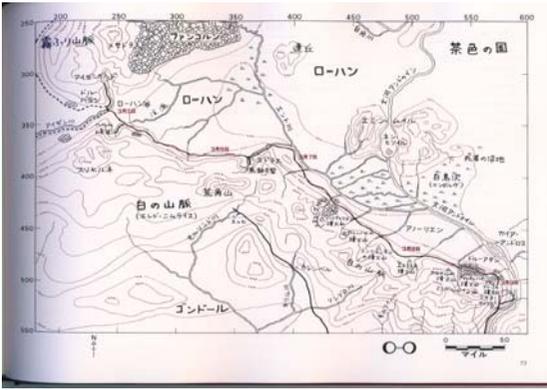
私が翻訳をする際、編集の方に勧められて、さらに日本語版には、物語のあらすじを書き加えることになった。この翻訳の出版のきっかけとなった映画『ロード・オブ・ザ・リング』を見て、その原作の『指輪物語』に興味を持ったこれからの日本人読者のために、必要だろうと思われたからだ。

実際に翻訳をし、あらすじを書き加える作業は、物語の中を再び旅する感覚に似ていた。そして、主人公フロドの歩んだ道のりが、いかに苦難に満ちた試練であったかを、今一度再確認した次第である。この本は、一冊の独立した本ではない。原作『指輪物語』や映画『ロード・オブ・ザ・リング』をより深く味わうための本だ。けれど、一度味わった感動を何度も反芻することを可能にしてくれるばかりでなく、また何度も味わいたいと思わせてくれる、貴重な旅のお供となる本なのだ。

ホビットの数多い食事を、読者も、紅茶を飲みながら、地図とともに味わって戴きたい。



■ 教員トピックス



新しい児童英語教育

外国語学部教授 豊田ひろ子

小学校への英語活動の導入に伴い、児童英語教師の就職市場が注目され始めた。私は、小学校で英語を教えることに関心のある学部生が、現場を知り実習を積み、いくらかでも就職の助けになるのではないかと考えていた。一方、大学では、地域貢献の活動に積極的に取り組む方針が打ち出され、八王子市内の小学校で英語活動のボランティアを探していた T 小学校で、私とゼミ生は今年の 4 月から月に 1~2 回の割合でお世話になることになった。

T 小学校の「英語活動クラブ」には 3 年生から 6 年生の 82 名の可愛い元気な子どもたちがいる。歌、絵本、ゲーム、書き取り、DVD 鑑賞等さまざまな活動を、私は可能な限り英語で行い、ゼミ生にはアシスタントをしてもらっている。その他、米国の高校生サッカー親善使節団が来校した際には、ゼミ生と私は、子どもたちの通訳や親善大使たちの給食の給仕などの体験もした。

このように、私が関わっている一連の児童英語教育活動で新しいのは、常にゼミ生と伴に行動していることかもしれない。先日、日暮里の T 高校で「児童英語教育の世界：英語で歌おう！」の出張講義をした際も、私は 9 人のゼミ生と一緒にだった。

私は優秀で心優しいゼミ生に恵まれている。だから敢えてすべてを見せる。かっこ悪くても構わない。英語は楽しい、英語は面白いと信じ、情熱を込めて伝えようと奮闘する一部始終を。「えっ、何て言ってるの？」と首を傾げる小学生。「英語は嫌い！」と叫ぶ高校生。根気強く、笑顔でサポートするゼミ生の姿は頼もしく、思いやりに溢れている。ビューティフルな心を持つ彼らが、逞しい英

語力を身に付けて、英語教師となる夢、英語を使う仕事に就く夢を成就してくれたら、日本はどんなに明るくなるだろうと思う。私は彼らを全面的にサポートしてゆきたいと思っている。

新しい生活を迎えて

外国語学部専任講師 嵐 洋子

この4月より杏林大学外国語学部の講師となり、あっという間に3ヶ月が経ちました。学部を3クラス、別科を4クラス教えていますが、最初は教室を探すだけで一苦労でした。

今まで、大学進学を目指す留学生をはじめ、ビジネスマン、海外日系人、主婦、子供と様々な国から来た様々な境遇の方に日本語を教えてきました。どこへ行っても新しい発見があり勉強させられることばかりでした。そして今、杏林大学でも新しい出会いがあり、色々なことを学んでいます。

先日は校外研修があり、留学生の皆さんと富士山へ行ってきました。と言っても、富士山に登るわけではなく、忍野八海や河口湖などからきれいな富士山を見ようというものでした。しかし、行ったのは6月、雨の降るあいにくの天気で、残念ながら富士山を見ることはできませんでした。それでも、70名ほどの留学生が参加する楽しい日帰り旅行となりました。

当日は、まずバスで忍野八海へ向かい、富士ビジターセンターで富士山の写真などを見学。炉端焼きのお店で昼食をとり、河口湖で猿まわしを見て帰るというスケジュールでした。驚いたのは、留学生のお土産と写真好き。どちらも「日本人の定番」という感じがしていましたが、とんでもない。雨にも負けず、変わったもの、きれいなものは全て写真に収め、富士ビジターセンターで「富士山の写真」を撮っている学生までいました。また、お土産も大好きで、数時間で買ったのかと思うくらいのお土産を買っている学生もいました。

これからも様々な出会いを通して、色々なことを勉強していきたいと思っています。日本人の学生の皆さんにも、言葉が分からないからなんて弱気にならずに、積極的に留学生と交流をしてほしいと思っています。



<コンピューターで作文を書いている留学生>



<忍野八海で留学生と：筆者右側>



<炉端焼きで煙に巻かれながら：筆者右端>

杏林大学って意外と・・・

外国語学部専任講師 倉林 秀男

いざ、自己紹介を書けといわれて、はたと困った。小さいころから、文章を書くのがとても苦手で、原稿用紙を目の前にすると、突然わからなくなる。遠足の後や、運動会の後に必ず書かされる作文、夏休みの読書感想文の宿題ほど嫌いなものはなかった。ましてや「自己紹介」なんか、うまくかけるはずもない。でも、ちゃんと書かないといけならしいので、29年と数ヶ月の人生を振り返り、何か自己紹介になるようなものを書いてみることにする。

中学のころからあまり勉強が得意ではなかった僕が、高校に進学することになった。高校1年目は、男子校という環境になじむのが精一杯。2年生になり、担任の英語の先生に出会ったことで、今でも英語に関わって生活をしている。そのときから、大学に入って英語を勉強したいという気になり、外国語学部と名のつく大学をいくつも受けたが、なかなか入学を許可されず、行き場の無くなりかけた僕を救ってくれたのが杏林大学だった。

そんなことで、八王子の山奥のキャンパスに4年間通うことになった。最初は、通うことすら嫌だったが、いつの間にか、大学に来ることが楽しくなった。大学で受けた授業はとても刺激的。ただ単に授業が楽しいというのではなく、そこには、先生方の学生に対する厳しさと、優しさもあった。それは、学ぶということの厳しさと、楽しさを教えてくれたのだと思う。授業が刺激的だということは、授業を担当していらっしゃる先生方が個性的、独創的であったり、非常に魅力的な方々だったからだろう。毎日、その独創的な授業に参加する楽しみが、自分で考える楽しみが変わり、いつしか、もっと勉強したいという気になってきた。

そんなことを考えているうちに大学4年になり、僕はもう少し英語の奥深さに触れてみたいという欲望に駆られ、無謀ともいえる、大学院進学の道歩み始めた。大学院の受験では、得意ではない英語が

大きな障害となっていたが、いつも、ゼミの先生に研究室で遅くまで勉強を見てもらい、また多くの先生方の指導を受け、ようやく、人並み(ぐらい)の英語力を身につけることができた。このとき、英語をみっちり指導していただけていなかったら、現在の自分はないと自信を持ていえるぐらい、この時期に多くのことを学んだ。杏林の先生方は、僕みたいな出来損ないの学生を見捨てず、徹底的に指導し、支えてくださいました。

今度は僕が後輩たち、みなさんを支え、指導していく番です。だから、授業では厳しいことをいいますが、それは、毎回の授業が真剣勝負だからです。人の話をきちんと聞くことや、学ぶ姿勢があり、正直な気持ちで授業に参加すれば、ちゃんと英語の力はついてくるということを僕は、杏林の授業を受けて知っています。そして、ちょっとでも困ったことがあったら、遠慮せずに、いつでも研究室にきてください。一緒に、杏林大学で成長していきましょう。そして、卒業するころには、杏林っていい大学だったね、と言えるような学生生活を送ってください。



[学位授与式のひとコマ, The University of Newcastle]

倉林秀男 (くらばやしひでお) 1976年生まれ
1999年 杏林大学外国語学部英米語学科卒業
2001年 獨協大学大学院外国語学研究科英語学専攻博士前期課程修了(修士:英語文化)
2003年 The University of Newcastle, Australia 修士課程修了(Master of Applied Linguistics)
2005年 獨協大学大学院外国語学研究科英語学専攻博士後期課程単位取得退学
秋草学園高等学校、西武学園文理中学・高等学校、川口市立芝東中学校、足立学園中学・高等学校の非常勤講師を経て、本年4月より杏林大学外国語学部専任講師。

はじめまして

外国語学部助教授 玉村 禎郎

(たまむらよしお)

はじめまして。玉村禎郎（たまむら よしお）と申します。専門は日本語研究でとくに語彙論を専攻しています。どうぞよろしくお願いいたします。

わたしは、京生まれの京育ちです。東京の人を「江戸っ子」と言うのならえ、わたしは「京都っ子」ということになります。京都の中京区三条烏丸辺りに生まれ育ったもので、卒業した小学校も織田信長の最期の地として有名な本能寺跡に建てられた本能小学校です。幼少期には歴史的な背景を知らないまま、学校の敷地内にある信長の碑にのぼってよく遊んだものです。

日本の三大夏祭の一つである祇園祭は本能学区と隣の明倫学区とが中心になって行う祭りで、七月の中旬ともなれば学区内は祭気分一色におおわれます。

京都には、ほかに平安時代からおこなわれている葵祭（『源氏物語』では「かものまつり〈賀茂祭〉」と言われています）や時代祭もあり、シーズンともなれば、街は観光客であふれます。そのような中で育ったわたしでしたが、やはり祇園祭に一番魅力を感じておりました。絢爛豪華な祭だから、地元の祭だから好きなのだろうと子どもの頃は思っていました。しかし、いつだったかは正確に覚えていませんが、ある時それだけではないということに気づきました。

祇園祭の場合、少年のわたしは、祭りの単なる一観客ではなく、祭に主体的に取り組む喜びが味わえる立場にいたことがとても大きな意味をもっていたということに。

少し大げさな言い方になってしまいましたが、この体験から、学生の皆さんには、ぜひ主体的に取り

組むことの楽しさ、成し遂げることの充実感を味わってほしいと考えるようになりました。

現代社会ではインターネットやゲームソフトなどで、実際には自分がその空間に居ないにもかかわらず、居るように感じたり、架空の世界に入ったりすることが可能になり、実体験したかのような気になってしまいます。

しかし、やはり架空の世界はどこまでいっても架空の世界のものでしかありません。実体験でしか得られないものがあるはずです。

学問にしる、クラブ活動にしる、何であっても、自ら取り組み、自分で考える姿勢を身に付けることの意義を、杏林生に語りかけていきたいと考えています。



<研究室でパソコンにむかって>

無気力学生が教員になるまで

外国語学部専任講師 古本 泰之

大学報に掲載される自己紹介を書くようにのご下命でしたので、自身の大学生活について思い出してみることになりました。しかし、起床→大学→飲み屋（たまにパチンコ）→帰宅というコースを繰り返したという記憶しか出てこず、愕然としました。これは私が長い間何に対しても興味が持てなかったことに起因している書きながら今気づいたのですが、このままだと問題があるので、現役の学生の方につながるような私の大学時代の特徴ある思い出を何とか挙げてみることにします。

1. 寮生活

私は東京都世田谷区にあった寮に大学・大学院を通じて6年間所属していました。寮生15人と寮長家族という小規模な寮ですが、文系・理系の学者からマンガ・アニメに大学生活をささげている人など多士済々な顔ぶれに囲まれる日々でした。そこで彼らに紹介されたさまざまな分野の学術書、マンガ、アニメ漬けという日々を送りました。私の現在の知識の多くはそこから得たものだと思います。

2. ホテル研究会

私が中高と男子校出身だったということもあり、女子大生に誘われたというだけで、ホテル研究会という大学のサークルに入りました。怪しげな名前ですが、戦後日本のホテル産業において一時代を築いた人々を輩出した名門で、「伝統」という魔物にひどく苦勞させられました。しかしサークルで決められている夏休み中1か月のリゾートホテル住込み実習を、地元の社員・パートさんたちに囲まれながら1日14時間の労働を4年間続ける中で、観光産業の存在を意識せざるを得なくなったことは事実です。

3. 無意味な挑戦

ある朝、布団の中で、自分は大学に授業料を払っているのだから大学から最大限のサービスを受ける権利があるのではと思い、その日から、設置科目すべてを可能な限り受講するという自分ルールを作っ

てみました。2年間にわたって週20科目程度受講し続けるうちに奇妙な快樂を苦痛の中にも感じるようになったのですが、同時に、産業論としての観光だけではなく、観光産業を主幹産業として受容した地域の文化・社会構造の変容という側面に焦点を当てた観光論の存在を知りました。

以上のような日々の中で、産業論と文化論が巧みにかかわりあっている観光論という分野の奥深さや愉しみに気づき、その結果杏林大学に奉職した次第です。

これらの経験を強引にまとめますと、大学生活では、人のつながりを大事にしつつ、「今しかできないこと」を見つけて、それがつまらないことでも執着してやることで、何か新しいものが見えてくるのではと思うのです。また杏林大学は、私からすると驚くほど懇切丁寧な教育プログラムが用意されていると思います。せっかく受験勉強をし、授業料を払って、この大学にいらっしゃっているのですから、これを活用するのも手ではないでしょうか。

私自身としては、かつて自分が母校に求めていることを鑑みて、全力で学生の方の学校生活を充実させるように努めていきますので、教室でも研究室でも気軽に声をかけていただければと思います。



古本 泰之（ふるもと やすゆき）1976年生まれ
1999年 立教大学社会学部観光学科 卒業
2001年 立教大学大学院観光学研究科観光学専攻博士前期課程修了（修士：観光学）
2005年 立教大学大学院観光学研究科観光学専攻博士後期課程単位取得退学
東京立正短期大学、信州短期大学、川村学園女子大学非常勤講師、本年4月より杏林大学外国語学部専任講師。

< J E C の由来 >

「ジェック」と読み、Japanese、English、そして Chinese の各々の頭文字をとったもの。杏林大学外国語学部の創設時の3学科「日本語学科」「英米語学科」「中国語学科」に因む。常に初心に立ち返り、教育と研究に全力を傾ける気持ちを意図する。

< 編集後記 >

『J E C』は、杏林大学外国語学部と学生のご父母・保証人の皆様を結ぶ情報誌です。内輪の話ですが、『J E C』が本年度より学生委員会から広報委員会へ移管されました。特集記事の学部長の言葉にもありましたとおり、杏会からのご援助のもと、学生サービスの一環として、教員が編集しております。

本年度は、昨年度と同予算で夏号・冬号の年2回発行予定です。在学生の皆さんが帰省される頃にお届けし、『J E C』を見ながら、杏林大学外国語学部についてのお話が弾めばと願っております。

内容も含めて、写真は総カラーと品質も高めることができました。編集者の無理な注文に答えて下さった先生方、学期末の試験期間が迫るなか協力を惜しまなかった在学生の皆さん、そして(株)柴田印刷所の柴田健彦氏のお陰です。ここに心より御礼申し上げます。

お読みいただいた皆様のご感想・ご意見をお待ちしております。

(広報委員会 J E C 編集担当 稲垣 大輔 inagaki@kyorin-u.ac.jp)

KYORIN JEC 2005年夏号	
発行年月日	平成17年7月30日
発行人	杏林大学外国語学部杏会 〒192-8508 東京都八王子市宮下町476 TEL 0426(91)0011
印刷所	株式会社 柴田印刷所 〒192-0062 東京都八王子市大横町2-6 TEL 0426(22)0857